

今に至る先生のエピソードを  
教えてください

小学校は剣道、中学は野球、高校は柔道と美術。大学受験するときに構造計算書偽造問題(姉齒事件、2005年)があり建築学科の人気の落ち、受験科目(二次試験)にデザインもあることから建築学科を受けました。この試験対策の考え方と対応が、この後にもできます。

建築学科はデザイナーや建築家を目指して入学してくる人が大半。ただ、どちらも競争が激しく、在学中にエンジニアへ方向変換。それも構造や防災という花形分野は避けて、設備や環境に。学生からの認知度も低く、競争はないだろうと考えました。(ところが、入ると大変でした)私が修士論文を書いている頃は、低炭素化、カーボンフットプリントをテーマとする研究も多く、私もその方面に興味を持ちテーマを選びました。

卒業後は同テーマに関連するシンクタンク、コンサル系の会社を狙って就活。面接が終わった頃に、東日本大震災(2011年)が発生。節電対策をどうするのか、ということが社会共通のテーマとなり、業務内容も思っていたものから随分変わりました。

二年ほど会社に勤め、ちゃんとエンジニアの勉強をしようと思い、博士課程に戻りドクターコースに入りました。この頃になると節電も落ち着いて、時代は水素かなと思いき、水素燃料電池の制御や集合住宅の導入というテーマでシミュレーション系の研究をしました(研究テーマは給湯)。自分なりに論文も書いて、ドクターもとれて、科学研究費助成事業も採用され、よし、これでなんとか研究やっていけると。が、香川大にきたときにコロナ禍。社会から換気や空調系の研究をやるのが非常に強く求められまして、窓開け行動の実測や、室内の空気を計測するという研究をやって、五年経ったという感じです。

社会から規定されないで、研究テーマや研究の方向性は自分で決めたい思いはあったのですが、思うようにはなりません。自分の研究室に所属する学生さんも、もしかしたら第一希望の研究室ではなかったかもしれません。でも、そんなことは社会に出たらいくらでもあります。私の研究テーマもどンドン変わっていますし、民間企業に就職したかと思えばドクターに帰ってきたり。大きな社会的出来事によってトレンド変更があっても、いちいち凹んではられません。新しい課題を要求されることを受けとめ、それに応えていこうと考えています。(一本筋が通っていないといけませんが、自分の筋は一体何なんだろうかと考えるときもあります苦笑)

困ったら研究室

なんとなく困ったとき、悩んでいるとき、研究が上手くいかないとき、私も学生さんも、おそらく「研究室」とは、座って頭を抱えたり、誰かに相談したり、「気分転換に遊びに行こうぜ!」と誰かを誘ったり…何かの行動の起点になる場所だと思います。

もちろん生きた人間が相手ですので、AI(チャッピー君)のように全肯定してくれたり、それらしい言葉も帰ってこず、「どうしたらいいんでしょうね…(匙投げ)」のようなつれない返事が返ってくることもありますし、「それやってなんか意味あんの」みたいな、辛辣なコメントを貰うこともあります。必ずしも明確な答えや方針が示されるわけではありません。

しかし、自身の大学院在籍時の経験からも、また、自分の研究室を構えてからも、大学教育の最も重要な事柄は、この研究室の中にあると思います。昔の徒弟制度的色彩の強い小講座制研究室は最近の時勢とは合わないところもありますし、研究コミュニティの最小単位としての役割も変わりつつありますが、学生自治的な側面もあり、研究プロジェクトにおいては上意下達?的な雰囲気もあり、中々に得難い体験の機会だと思います。また、そういうことができるよう、学生のみなさんと運営したいと思います。

建築・都市環境コース 講師

山本高広



教員紹介



研究室紹介

やまもとたかひろ  
2006/4~2010/3(4年間)  
九州大学工学部建築学科  
2010/4~2012/3(2年間)  
九州大学大学院人間環境学府空間システム専攻  
2012/4~2014/5(約2年)  
株式会社住環境計画研究所研究員  
2015/4~2018/3(3年間)  
九州大学大学院人間環境学府空間システム専攻  
2018/10~2020/3(1年半)  
九州大学大学院人間環境学府助教  
2020/4~  
香川大学へ